

『デカルト＝エリザベト往復書簡』における

デカルトの道徳観

個人と社会的人間

室井 茜

はじめに

「理性と情念を併せ持った『人間』の幸福 ——『デカルト＝エリザベト往復書簡』におけるデカルトの幸福観¹ ——」では、1643 年から 1649 年の 7 年間にわたってデカルトがボヘミア王女エリザベトと交わした書簡の中で展開した幸福論を取り上げ、デカルトによる「至福」の定義と、人間が「至福」を獲得するために遵守すべき三つの事項とを明らかにした。デカルトにおける「至福」とは、「精神の完全な満足と内的充足²」である。そして、人間が精神の満足を獲得するためには、第一に、あらゆることを理性の行使によって判断しなければならない。第二に、情念や欲望に逸らされることなく、一度善であると判断したものには一貫して従わなければならない。第三に、自分の能力の範囲外にあるものは決して望んではいけない。人間が「至福」を獲得するためのこの三つの事項を、我々は「積極的道徳³ *« morale positive »*」と呼んだ。理性を使って積極的かつ自発的に判断し、善を獲得しようとする姿勢こそが、デカルトにとっての「徳」なのであった。さらにデカルトは、エリザベトとのやり取りの中で、人間が理性と情念を併せ持った存在であることを認めた⁴。その上で、ストア派のように情念を悪としてとらえ排除しようとするのではなく、理性で情念を抑制することにこそ人間の精神の満足を

¹ 拙稿、『仏語仏文学研究』第 35 号、東京大学仏語仏文学研究会、2007 年 9 月 15 日発行、pp. 29-51.

² Lettre de Descartes à Elisabeth du 4 août 1645, AT, t. IV, p. 263. (デカルトの著作及び書簡の引用は全て *Œuvres de Descartes*, publiées par Charles Adam et Paul Tannery, 11 volumes, J. Vrin, Paris, 1996 を用いた。本稿では AT と略する。)

³ 前掲(注 1) 拙稿、p. 42 を参照。

⁴ 『デカルト＝エリザベト往復書簡』において、デカルトは人間を「心身合一」体」としてとらえている。1645 年 10 月 6 日付の書簡では、人間のうちに生じる「情念 *« passion »*」の定義を行っている。

あるのだと主張した⁵。

しかし、幸福をめぐる二人の議論はそれだけでは終わらない。「理性の真の役割は、あらゆる善の正当な価値を吟味することです。それらの善の獲得は、何らかの方法で我々の振る舞いに依存しているように思われます⁶」と言うデカルトに対し、エリザベトはこのように述べる。

善をそのように評価するためには、善について完全に知らなければなりません。そして、私たち人間が現実の生において選択を迫られているあらゆる善について知るためには、無限の知識を所有しなければなりません⁷。

確かに、デカルトはこれまで、正しく判断し善を獲得しようとする意志、すなわち「徳」に常に従うようにと勧めてはいたものの、何を善であるかと思えばいいのかという基準についてはまったく言及していなかった。さらにエリザベトは、新たに大きな問題を提起している。

満足を、それを引き起こす完全性に従って測るためには、我々にのみ役に立つもの〔＝完全性〕がいいのか、あるいは我々を他者にとっても有益なものにするようなものがあるのか、それぞれの完全性の価値をはっきりと見なければなりません⁸。

エリザベトは、精神の満足を獲得するために善を測ろうとする中で、他者の存在を考慮している。エリザベトはボヘミア王女という立場上、常に宮廷人に囲まれて生活しており、人とのかわりから逃れることができなかった⁹。さらにエリザベトは、自分や自分の一家を襲う悲劇的な運命に心を痛めることが多かったが¹⁰、自分の家族に対して深い愛情を持ち、ファルツ家の再興を強く願っていたので、いつでも一家の利益をなおざりにすることはできなかった¹¹。したがってエリザベトは、何が善であるかを判断するとき、ただ

⁵ 前掲（注1）拙稿、pp. 42-50 を参照。

⁶ *Lettre de Descartes à Elisabeth du 1^{er} septembre 1645*, AT, t. IV, p. 284.

⁷ *Lettre d'Elisabeth à Descartes du 13 septembre 1645*, AT, t. IV, p. 289.

⁸ *Ibid.*, p. 289.

⁹ エリザベトは、自分の精神が弱っている原因を、「あるときは私の一家の利害をなおざりにすることができませんし、またある時は人との会話や人への心遣いを避けて通ることができないせいだ」と語っている。（*Lettre de Descartes à Elisabeth du 20 juin 1643*, AT, t. III, p. 684.）

¹⁰ エリザベトの心痛の原因については、前掲（注1）拙稿、pp. 30-35 を参照。

¹¹ 1648年7月のデカルト宛書簡の中で、エリザベトは「一家の利益のためなら命を捨てようと思っています」と語っている。（*Lettre d'Elisabeth à Descartes du juillet*

自分本位に善を望むことはできなかったのである。デカルトは、それまで個人としての人間の道徳をエリザベトに教え諭してきたのであるが、エリザベトのこの要求によって、共同体における人間の道徳についても語らざるを得なくなる。

そこで本稿では、『デカルト＝エリザベト往復書簡』を通して、デカルトにおける善とは何かを検討することを出発点として、「人間」が個人であると同時に「社会的人間」であると主張されるまでの過程を考察し、その結果どのような道徳が新たに誕生するのかを検討したい。

1. 四つの根本的真理

a) 第一の真理、第二の真理、第三の真理

さてデカルトは、エリザベトの要求に対し、善について正しく判断するためには根本的真理の認識が必要であり、それを判断のたびに思い起こす習慣を身につけなければならないと述べる¹²。しかし、世界についての完全な知識を持っているのは神のみであるから、今から自分が挙げるいくつかの真理は完全な真理ではなく、我々が知っていると有益なものという意味での真理であるということを付け加えている。デカルトはここで四つの真理を挙げている。しかし、初めの三つの真理と最後の第四の真理とは性格が非常に異なる。初めの三つの真理は、神、人間の精神、神が創造した宇宙と人間に関する真理であり、ここでは個人としての人間が神や宇宙をどのように認識すべきかが問題となる。一方、注目すべきなのは第四の真理である。というのも、この第四の真理では、全体の構成要素としての人間が問題となっており、そこにデカルトにおける「社会的人間」の誕生を見ることができからだ。したがって、ここではまず第一の真理から第三の真理までをまとめて検討し、その後で第四の真理について取り上げることにする。

まず、デカルトが第一の、そして主要な真理として挙げているのは、「唯一の神がいて、いかなるものも神に依存しており、神の完全性は無限で、力は広大であり、掟は不可謬である¹³」ということである。人間は完全性を愛するものであるから、神について考察すれば、我々は自然と神を愛するようになる。そして、我々人間の身に起こることは全て神から送られてきたもの

1648, AT, t. V, p. 210.)

¹² Voir la lettre de Descartes à Elisabeth du 15 septembre 1645, AT, t. IV, p. 291.

¹³ Lettre de Descartes à Elisabeth du 15 septembre 1645, AT, t. IV, p. 291.

であると受け止め、いい意味に解釈することができるようになる。エリザベトはこれに対し、デカルトによるこのような神の認識は、天災や死などといった、神が自然に敷いた秩序に由来する不幸を慰めるのには役立つが、自由な意志を持った人間が別の人間に不幸を強いる場合には何の慰めにもならないと反論する¹⁴。するとデカルトはこう説明する¹⁵。神が存在するという証明は、人間が最高で完全な絶対的存在の観念を持っているところに由来するのであり¹⁶、もしこの世に神の意に由来しないことが起こりうるとするなら、神の完全性は欠如し、神は最高に完全ではなくなってしまう。したがって神は、人間の自由意志に依存する全てのことに關してもその原因であると言える。人間の自由意志というテーマに關しては、このあと四通の書簡にわたって二人の意見が交わされた¹⁷。エリザベトは、人間の自由意志が神の意志によるものであるならば、真の意味で自由ではないと主張し続けた。本来人間は、神に束縛されることなく自由に判断して行動することができるはずではないか。それに対し、デカルトは、人間が自由意志によってどのような決定を下すのかということさえも神は既に知っているが、だからといって自由意志にある決定を強いることはないのだと主張した。

人間が知るべき第二の真理は、「我々の魂の本性、つまり、肉体なくして魂が存在し、肉体よりはるかに高貴であり、この生において決して存在しない無数の満足を享受することができる限りにおいての我々の魂の本性¹⁸」である。我々の魂は肉体のうちに存在してはいるが、永遠に滅びることがないので、現世で享受することができない満足を来世で享受することができる。そのことを知ると、人間は現世への愛着を減らし、死を恐れず、運命によってふりかかる悲運を軽く受け止めることができるようになる。この第二の真理に關しても、エリザベトはデカルトに反論する¹⁹。精神の高貴さを知り、死を恐れないとしたら、人間は死後の幸福の方を追求するのではないか。というのも、死によって身体的病氣や情念から解放されるからである。人間が、自由な精神で楽に過ごすことができる死よりも、苦痛や悲しみに満ち溢れた生を選ぶのはなぜだろうか。デカルトは、エリザベトの指摘を認める。魂の

¹⁴ Voir la lettre d'Elisabeth à Descartes du 30 septembre 1645, AT, t. IV, p. 302.

¹⁵ Voir la lettre de Descartes à Elisabeth du 6 octobre 1645, AT, t. IV, p. 314.

¹⁶ Voir le *Discours de la Méthode*, 4^e partie, AT, t. VI, p. 34.

¹⁷ 1645年10月28日付エリザベトの書簡、1645年11月3日付デカルトの書簡、1645年11月30日付エリザベトの書簡、1646年1月付デカルトの書簡の計四通である。

¹⁸ Lettre de Descartes à Elisabeth du 15 septembre 1645, AT, t. IV, p. 292.

¹⁹ Voir la lettre d'Elisabeth à Descartes du 30 septembre 1645, AT, t. IV, p. 302.

不死を認識することは、現世に絶望した人が死を選ぶ理由になり得る²⁰。しかし、来世において享受するであろう満足には何の保証もない。したがって、死を自ら追い求める前に現世において常に徳に従っていれば、必ず現世のうちに満足を得ることができる。それは人間の自然的理性によって保証されている²¹。真の哲学は、どんな肉体的苦痛のさなかにあっても正しく理性を使いさえすれば人間はいつでも満足した状態であることができるのだと教えるのである。

人間が知るべき第三の真理は、「神の作品をしかるべく判断し、宇宙の延長に関する広大な観念を持つこと²²」である。この真理は、人間の傲慢を避けるための真理でもある。人間は、天空が地球のためだけに創造され、地球は人間のためだけに創造されていると思い込み、他の被造物を支配して世界を導いていこうという高慢な欲望を持つ傾向にある。しかし、神が創造した世界の広がりの大さを認識すればするほど、神の能力の偉大さに気づき、人間至上主義に陥るのを防ぐことができる。それは世界のメカニズムを学問によって探求することでもある。エリザベトはこのデカルトの主張に対し、人間の思考が広大な宇宙へと向けば向くほど偉大な存在へと思いを馳せることはできるが、反対に偉大な存在と卑小な人間存在とのかかわりを切り離してしまうことになるのではないかと危惧する²³。しかしデカルトは、神の偉大さを理解すればするほど、その強大な力が卑小な人間にまで及んでいることを人間は確信するのだと主張している²⁴。

b) 第四の真理

これまでに提示された三つの根本的真理では、神の善性、人間の魂の不死、宇宙の広大さを認識することが人間の正しい判断に寄与するということが示された。これらの真理はデカルトの世界観を明確に示すものでもあり、デカルトの道徳観の重要な柱としてとらえることができる。そしてこの後、デカ

²⁰ Voir la lettre de Descartes à Elisabeth du 6 octobre 1645, AT, t. IV, pp. 314-315.

²¹ 「同じ自然的理性は、この世には常に悪よりも善の方が多くあることを教え、また不確かなもののために確かなものを手放すべきではないと教えているので、我々は死を本当に恐れるべきではないですが、死を追い求めることも決してしてはいけなと理性は我々に教えているように私には思われます。」(Lettre de Descartes à Elisabeth du 3 novembre 1645, AT, t. IV, p. 333.)

²² Lettre de Descartes à Elisabeth du 15 septembre 1645, AT, t. IV, p. 292.

²³ Voir la lettre d'Elisabeth à Descartes du 30 septembre 1645, AT, t. IV, pp. 302-303.

²⁴ Voir la lettre de Descartes à Elisabeth du 6 octobre 1645, AT, t. IV, p. 315.

ルトはさらにもう一つ、「知っていると非常に有益であると思われる真理²⁵」を付け加えるのである。

それは、我々の各々は他の人から切り離された一人の人間であり、したがってその利益は世界の他の人の利益とはある意味で区別されるものであるにもかかわらず、次のように考えなければならないということです。我々はたった一人では生きていくことができないということ、そして実際に我々は宇宙の一部分であり、より厳密に言えば、この地球の一部でもあり、この国家の、この社会の、この家族の一部でもあるということです。我々は、それらのものに、居住地や誓いや生まれによってつながっているのです²⁶。

デカルトは、自動機械としての肉体と不滅の理性的魂、そして両者の結合体である人間について生涯をかけて研究していたが、著作で語られてきた人間は常に個別的であった。『方法序説』においても、『省察』においても、「われ思う、ゆえにわれあり」から発見された人間の理性は常に思考する主体であり、他者の理性と交わることもなかった。さらに、先に検討した第三の真理を通して人間は相対化され、非常に小さな存在に過ぎないということを認識し、その結果神の力の偉大さを認識する一方で、人間の孤独を感じることを余儀なくされた。しかし、この第四の真理において、人間は自らの新たな存在意義を知らされることになる。人間は広大な宇宙を作り上げる一つの部分であるということ、つまりある全体を構成するのに必要不可欠な要素であるということである。ここで言う全体とは、宇宙という大きな延長のみを指すわけではない。デカルトは、最も大きな全体を宇宙であるとし、国家、社会と続き、最も小さな全体は家族だとしている。しかし、宇宙や地球とその他の全体、つまり、国家、社会、家族とは性質が異なる²⁷。宇宙や地球は神によって創造された全体である。しかし、他の全体は人間が作り出す全体である。人間が全体を作るための条件として、デカルトは住んでいる場所、誓

²⁵ Lettre de Descartes à Elisabeth du 15 septembre 1645, AT, t. IV, p. 293.

²⁶ *Ibid.*, p. 293.

²⁷ ロディス＝レヴィスによると、我々が「社会の一部分である」と言う時、「宇宙の一部分である」ということと意味が異なる。デカルトは、社会を作るための現実的条件として、ある人間をある国家、ある家族の中に生まれさせるというような偶発的状況に加えて、「誓い」を挙げている。「誓い」は人間個人の意志による同意である。人間が宇宙の構成要素であるのは人間の意志とは無関係であるが、ある社会の構成要素であるためには、我々の意志に依存しないものによって必然的に一部分となるだけではなく、自らの意志によって一部分になることを志望することが可能なのである。cf. G. Rodis-Lewis, *La Morale de Descartes*, 1^{ère} édition « Quadrige », PUF, Paris, 1998, pp. 95-96.

い、出自を挙げている。まず一人の個人がいて、個人同士が結婚し、子供が生まれる。それが最も基本的な全体、家族である。家族を構成する各々の人間は、職業や隣人との付き合いなどを通して、血縁関係とは違う所で共同体を作る。それが社会である。そして、複数の社会の集まりによって国家ができる。国家は中間団体や家族を包含する。このように、世界はレベルの異なる全体の連鎖によって成立しており、個々の人間は必ず多様なレベルの全体に同時に属しているのである。したがって、人間は孤独ではない。

このようにデカルトは、著作の中では決して語ることのなかった共同体における人間の姿を『デカルト＝エリザベト往復書簡』の中で問題にしようとしている。これまでの形而上学的思索においては、人間は思考する存在であり、理性だけが人間の存在を証明するものであった。そして、考える「私」の存在から神が証明され、さらに神の被造物としての世界の解明へと向かう。真理の追究においては、思考する主体である「私」が、一人孤独に理性を行使して世界と向き合うことだけでよかった。しかし、実生活に目を移し、何が善であるかを正しく評価することによって自分を満足させ、「至福」を享受することが問題となるときには、哲学者であるデカルトでさえも、自分の周りにいる人間との関係を考慮しないわけにはいかなかった。ましてや、文通相手であるエリザベトは、王家の人間として、国や宗派と運命を共にする立場にある人間である。社会と距離を置いた人間の道徳をエリザベトに対して語ることなど不可能であり、非現実でしかなかったのである。

それでは、人間が全体の一部であることによって、どのようなことが要求されるのだろうか。

一個人の利益よりも、自分が一部をなしている全体の利益を常に優先させなければなりません。しかし、それは節度と慎重さを伴ってのことです。[...]もし自らを公共の一部だと見なすならば、あらゆる人に喜んで善をなし、機会があれば他人への奉仕のために自らの命を差し出すことさえも恐れないでしょう。さらに、他人を救うために、可能ならば自分の魂を失おうとまでするでしょう。したがって、このように考えることが、人間のなす最も英雄的な行為すべての源泉であり起源なのです²⁸。

もし人間が自分の利益ばかりを追求し、他者の利益を侵害するようなことがあれば、自分自身も誠実さや美徳を獲得することができないであろう。さらに、人間が「英雄的な行為」を行うとき、それが人から評価されることを目

²⁸ Lettre de Descartes à Elisabeth du 15 septembre 1645, AT, t. IV, pp. 293-294.

的としていたり、愚かさゆえに危険に気付かず命を失う羽目に陥ったにすぎないのであれば、その行為は尊敬どころか哀れみの対象となる。人間が、虚栄や無知によってではなく、「自分の義務だと思って自分の身を死にさらすとき、あるいは他の人に善がもたらされるようにと自分が何か他の悪に耐えるとき²⁹」、それらの行為は、個人としての自分以上に、自分が一部分をなしている社会に負っているものが多いという考えから生じる行為であり、「しかるべく神を知り、神を愛するとき³⁰」にしか行うことができない行為でもある。この「しかるべく神を知り、神を愛する」というのは、第一の真理で述べられたような神の認識を持つということを意味する。他者のために自分が犠牲となるとしても、悪を避け、善を行うためであれば、それも神の意志によって決められたことであると受け止め、苦しみにも耐えることができる。したがって、「神を知り、神を愛する」ということは、全知全能で完全性の極みである神が存在することを認識し、神が持つ最高の完全性を愛し、自分の利益を犠牲にしても神の気に入ること以外しない、つまり常に善のみを目指して行動するということである。人間は「その結果、感覚に依存するつかの間の小さな喜びとは比べ物にならないくらい価値のある精神の満足と充足を享受する³¹」ことができるのである。

ここで、デカルトが1645年8月4日付のエリザベト宛書簡で定義した「至福」、つまり「精神の完全な満足と内的充足」に新たな側面が加わったことになる。上記の書簡では、人間が生きていく中で「至福」を享受するためには、常に善を目指して理性で物事を正しく判断し、自分の精神を満たすだけで十分であるとデカルトは述べていた。しかし一方で、善を正しく判断するためには、人間は一人では生きていけないということ、そして各個人は全体の一部分をなす社会的人間であるということを認識することが必要であると主張された。したがって「人間」は、個人として「積極的道德」に則った態度を取らなければならないと同時に、社会的人間として根本的真理の第四の真理にあるような認識を持たなければならない。結果として、これら両側面において「精神の満足」を獲得するのである。社会的人間は、自らを取り巻く全体に対して、強い連帯意識を持っている。共同体における他者とのかわりの中で、自らの利益よりも自分が属している全体の利益を優先し、神の意志に従った「英雄的な行為」を行う態度こそが、「社会的人間」の徳なので

²⁹ *Ibid.*, p. 294.

³⁰ *Ibid.*, p. 294.

³¹ *Ibid.*, p. 294.

ある。

2. 良心と「実践的理性」

a) 社会的人間の徳 —— 良心に従うこと

1645 年 9 月 15 日付のデカルトの書簡における四つの根本的真理を読んだエリザベトは、同年 9 月 30 日付のデカルト宛書簡において、それぞれの真理を批評している。第一の真理から第三の真理までに関しては、既に本稿でエリザベトの批判も含めて検討した。第四の真理、すなわち個々の人間を全体の一部としてとらえ、個人の利益よりも全体の利益を優先させるべきだという真理に対しては、エリザベトは次のように指摘している。

我々は全体の一部であるので、全体の優位を追求しなければならないという考えは、あらゆる高潔な行為の源です。しかし、あなたがそれらの行為について定めている条件の数々の中には多くの問題点があります。悪の観念は〔善の観念に比べて〕より判明であるだけに、我々にはより大きく見えてしまうのですが、公共のために自らに与える悪を、これから起こるであろう善に対して、どのように測るのでしょうか³²？

デカルトは第四の真理を提示した際、自分の利益よりも共同体の利益を優先させなければいけないと述べていたが、「それは節度と慎重さを伴ってのこと」であると条件付けしていた。デカルトはその理由を次のように述べている。

なぜなら、自分の親戚や国に小さな善をもたらすただけに大きな悪に自らの身をさらすのは間違っているでしょうし、ある人間が、一人だけで、自分の街の他の人全てよりも価値があるとしたら、その人が街を救うために自らの命を捨てようとするのは正しくないからです³³。

つまりデカルトによると、自分の利益と全体の利益のうち、どちらを優先させればいいのか迷ったとき、ただむやみに自分が犠牲となればいいのかというわけではない。より大きな善を獲得できる選択、あるいは悪を最小限にとどめることができる選択をしなければならない。自分が犠牲になることによって他者や共同体により大きな善がもたらされるのであれば、自分の利益をなげ

³² Lettre d'Elisabeth à Descartes du 30 septembre 1645, AT, t. IV, p. 303.

³³ Lettre de Descartes à Elisabeth du 15 septembre 1645, AT, t. IV, p. 293.

うつことは「英雄的」であるが、実際には自己犠牲が常に大きな利益をもたらすとは限らない。自己を犠牲にすることによって得られる善と失う善、同時に生じる悪の大きさを、常に比較して考慮しなければならない。さらにデカルトは、1645年10月6日付の書簡で、善悪の判断基準についてより詳しく説明している。

告白しますが、理性がどれほどまで公共の利益を考えるように命じているのかを正確に測るのは難しいことです。しかし、それは、非常に正確でなければならないことではありません。自分の良心を満足させるだけで十分です。そしてそのことに関して、我々は自分の性向に多くを委ねることができます。というのも、神は物事の秩序を非常にきちんと確立し、人間全体を非常に狭い一つの絆によって結びつけたので、それぞれの人間が全てを自分本位に考え、他の人に対していかなる慈愛も持たないとしても、思慮を用いさえすれば、そして特に慣習が腐敗していない時代に生きているならば、自分の能力の範囲内にある全てのことに、普通なら、他人のために尽くし続けるでしょう³⁴。

デカルトは、社会の中にいる人間が公共の利益を優先させることを問題とするとき、その基準を理性で正確に定めることはできないということを認めている。それどころか、理性で利害をそれほど厳密に測る必要はないとまで言っている。そこで、他者に善をなす場合に基準とすべきものとして、新たに「良心」を提案している。人間が普通の社会の中で思慮深く生きている限りは、自然に他人の利益も考慮に入れるようになっていっているとデカルトは考えている。そして最終的に、社会的人間が実践的に行動する上で遵守すべきだと思われる格率をこのように提案する。

社会における一般法はすべて、お互いに善をなす、あるいは少なくとも悪をなさないということを目指していますが、その法は非常によく確立されているように思われますので、いかなる偽りも技巧もなく素直にそれに従う人は誰でも、他の道によって自分の利益を追求する人よりも、ずっと幸福で確かな人生を送ります³⁵。

結局のところ、デカルトは、いつどのような利益を優先させるべきかという具体的な格率は示すに至らなかった。社会的人間としての徳の基本は、自分の利益ばかりを追求せず、社会全体の利益を尊重するというものであったが、

³⁴ Lettre de Descartes à Elisabeth du 6 octobre 1645, AT, t. IV, pp. 316-317.

³⁵ Lettre de Descartes à Elisabeth de janvier 1646, AT, t. IV, p. 357.

最終的にデカルトにとっての社会的人間の理想的な態度は、良心に自然に従い、悪を避け、おのずから善を目指す態度であって、その結果、他者の利益を尊重することで自分の良心も満たされ、幸福を享受することができるのである。『情念論』の中には次のような記述がある。

我々がこうして自ら満足するものを持つためには、徳に正確に従うことしか必要でない。なぜなら、自分が最善であると判断した全てのことをなすという態度（私がここで徳に従うと呼んでいること）を欠いたと良心にとがめられることのないように生きた者は誰でも、ある満足感を受け取る。その満足感は、人を幸福にするのに非常に強い力を持っているので、情念がいかに激しく働きかけたとしても、精神の平静を乱すのに十分なほどの力は決して持っていない³⁶。

つまり良心は、善だと判断したことを行うという徳に反した場合に警鐘を鳴らす一種のパロメーターなのである。個人的生活の中では、人間は理性を行使すれば物事の善悪を判断することができたが、社会の中にいる場合、社会全体の利益とは何かを完全にかつ正確に把握することも困難である上に、社会の利益と個人の利益とを秤にかけたとしても明確な答えが出るとは限らない。しかし、そのような状況でも、「自分が最善であると判断した全てのことをなすという態度」を欠かすことがなければ、後悔という最も恐るべき情念を引き起こすのを避けることができる。人間が徳を欠かさずに行っているかということ測る基準となるのが良心なのである。

b) 「理論的理性」と「実践的理性」

デカルトが社会的人間について語り始めると、エリザベトは次のように要求をする。

あなたはすでに個人生活については主要なことを述べられましたので、市民生活についてのあなたの格率をさらに教えていただけましたらうれしいです。市民生活は我々を理性的でない人々に依存させますので、それ[＝市民生活]にかかわることにしましては、理性よりも経験に従ったほうがいいのだとこれまで常に思ってきたではありませんが³⁷。

これを受けてデカルトは、「私は非常に隠遁した生活を送っており、政治を扱う立場から常に遠のいたところにおりますので、もし私が市民生活におい

³⁶ Descartes, *Les Passions de l'Âme*, Article CXLVIII, AT, t. XI, p. 442.

³⁷ Lettre d'Elisabeth à Descartes du 25 avril 1646, AT, t. IV, pp. 405-406.

て遵守すべき格率について書こうなどという計画を立てますならば […] 無礼になるでしょう³⁸」と自らの立場を説明する。デカルトは、真理の探究のために哲学的思索を始めたとき、その後の人生における心構えを『方法序説』第六部で表明していた³⁹。自分に残りの人生を自然に関する知識の獲得にのみ費やそうと思っているが、それに関して何か大きな成果を上げると公言して、公衆に対して責任を負うことは避けたい。同時に、社会的地位を得て何かに束縛されたり妨害されたりするよりも、自由に自分の時間を真理の探求にのみ費やすことができればこれ以上の幸せはない。そのために社会とは距離を置き、社会に関することには口出しをしない。自らの鍛錬と至福の享受のため一人で思索を続ける、それこそがデカルトの「哲学者」たる生き方である。したがって、哲学者デカルトと公人エリザベトとでは、置かれている状況が全く異なっていたのである。

デカルトが、全体の一部としての個人について語るとき、その全体とは、具体的には宇宙、世界、国家、社会、家族を指していた。それらがどのようにして作られた集まりなのかといえば、神が定めた確固たる秩序の中に置かれ、人間たちが神の意志により緊密に集められることによって構成される全体であった。デカルトにとって、そのような全体の利益を優先するということ、あるいは「公共の役に立つ」こととはどのようなことを意味していたのであろうか。『方法序説』第六部を見てみよう。デカルトは、ガリレオ断罪事件の知らせを受けて、出版予定だった『世界論』の出版を断念する。そして、自分の意見を発表するのは控えようと決意したが、やがてこのように考えるようになる。

少しでも重要性があると判断する全てのものを、発見した真理に応じて書き続けることが本当に必要であると考えに至った。 […] それはまた、もし私にできることなら、公共の役に立ついかなる機会も失わないためであった。そして、私が書いたものがいくらかでも価値を持つなら、私の死後それを手にするであろう人たちが一番ふさわしくそれを使うことができるようにするためであった⁴⁰。

続いてデカルトは、「人間は各々、自分の力の及ぶ範囲内にいる限り、他人に対して善をなさなければならないのは本当であるし、誰の役にも立たない

³⁸ Lettre de Descartes à Elisabeth de mai 1646, AT, t. IV, pp. 411-412.

³⁹ Voir le *Discours de la Méthode*, 6^e partie, AT, t. VI, p. 78.

⁴⁰ Descartes, *Discours de la Méthode*, 6^e partie, AT, t. VI, pp. 65-66.

ということは本来何の価値もない⁴¹」と述べ、後世に利益を残すことを何よりも優先させたいという意向を示している。結局、デカルトにとっての利益とは、「個人」が精神を満たして人生を送るための真理を獲得することである。したがって、デカルトにとっての「公共の役に立つ」とは、デカルト自身が獲得した真理を多くの人に伝え、真理を獲得するための方法を死後公に示すことを意味している。これこそが、哲学者デカルトの使命である。

しかし、エリザベトにとっての利益とは、個人的な、また形而上学的な利益に収まるものではない。エリザベトは、ファルツ選帝侯であったフリードリヒ5世の息女である。したがって、エリザベトにとっての家族とはファルツ家全体を指すのであり、国の利害を背負い、国民の利害も背負い、さらには宗教勢力の利害も背負わなければならなかった。それゆえエリザベトが「必要ならば一家の利益のために命をも捨てる覚悟でいます⁴²」と宣言するとき、「一家の利益」とは、三十年戦争におけるボヘミアの敗北によって没落したファルツ家の再興を指すのであり、政治のレベルでは自分の一家の政治権力の回復、宗教のレベルでは自らが信仰するプロテスタントの繁栄を意味しているのである。したがって、エリザベトが「至福」を享受するための「積極的道德」をデカルトから提示されるまで、王女個人としての利益や幸福を追求しようとしてこなかったのも当然である。むしろエリザベトにとっては、私生活、つまり社会の利害関係の影響を受けない完全な個人生活など存在しなかったのだ。

したがって、デカルトの語る哲学者としての道徳と、エリザベトが求める市民としての道徳との間には大きな溝がある。そして、その溝は最後まで埋まることはなかった。しかしデカルトは、根本的真理の第四の真理で社会的人間に言及することによって、精一杯エリザベトに歩み寄ろうと努力したのだ。

そして私は、殿下が提案なさっている格率が、あらゆる格率のなかで最良のものであるということを疑いません。つまり、市民生活においては、理性よりも経験を模範にした方がよいのです。というのも、あらゆる人間が、何をすべきかを考えるだけで実際に何をするか判断することができればそれに越したことはないのですが、それほど完全に理性的な人間を相手にすることは珍しいから

⁴¹ *Ibid.*, p. 66.

⁴² Lettre d'Elisabeth à Descartes de juillet 1648, AT, t. V, p. 210.

です。そして最良の忠告が最も幸せな忠告ではないこともしばしばです⁴³。

ここでデカルトは、社会生活においては理性に適ったことが必ずしも正しいとは限らないということ、そして社会生活における理性の行使には限界があることを認めている。その上でデカルトは、『デカルト＝エリザベト往復書簡』の中で、社会生活で従うべきであるものを二つ挙げている。一つ目は、住んでいる土地の習慣である。これはデカルトが根本的真理の認識についての言及の直後に付け加えていたことであるが⁴⁴、善を正しく判断するためには、自分が住む土地の習慣の中から最も真実らしいものを選び出すことが必要なのである。判断をしかねる場合にも、後悔を避けるため、優柔不断でいることはせず、何らかの態度決定をしなければならない。二つ目は、ここで述べられている通り、経験である。自分一人が理性に適った生活をしていても、自分と同じ共同体を構成する他の人間は理性の行使を誤っていることがある。また、自分が善だと判断して実行したとしても、その共同体の中では悪として判断される場合もある。個人としての「私」が思索を行う限りでは他者の理性とはかかわりがなかったが、社会的人間は実際に理性と情念を備えた生身の人間を相手にしている。その場合、各々の人間が持つ情念や理性の度合いは異なっている。なすべきことを完全に理性的に行う人間ばかりとは限らない。したがって、土地の習慣や経験を考慮した上で態度を決定することが重要なのである。ここで敢えて理性を区別するならば、個人の道徳において拠り所となる理性を「理論的理性」、社会的人間の道徳において拠り所となる理性を「実践的理性」と呼ぶことができよう。「人間」は、「理論的理性」を行使して真理を探究し、常に正しく判断することによって精神を満足させ、「至福」を獲得する。一方、善の普遍的な基準を設けることのできない実践的行為の世界、つまり他者とかかわる共同体の中では、社会とその社会の構成員に適した態度を取るようになしなければならない。そこで「実践的理性」を行使し、自らの良心を満たすような善を選びながら幸福を得るのである。

おわりに

本稿では、これまでの『デカルト＝エリザベト往復書簡』におけるデカル

⁴³ Lettre de Descartes à Elisabeth de mai 1646, AT, t. IV, p. 412.

⁴⁴ Voir la lettre de Descartes à Elisabeth du 15 septembre 1645, AT, t. IV, p. 295.

トの幸福観の研究を土台として、デカルトにおける善とは何かを考察した上で、個人のみならず「社会的人間」の道徳をデカルトが語る過程をたどってきた。デカルトにとっての「人間」は、理性と情念を併せ持った存在であり、また個人であると同時に、全体の一部をなす要素である。その上で、神の完全性の分け前である理性を行使して情念を抑制し、自由に正しく生きていかなければならない。同時に、社会生活においては、習慣や経験を考慮しながらも、自分が属する全体の利益を優先させなければならない。デカルトはそのような現実を真摯に受け止めている。

とはいえ、デカルトの道徳観は、エリザベトから度々批判されているように、個人にとっては有用であっても、社会的人間にとっては現実味に欠け、不十分な点も多い。個人の「理論的理性」と比較して、社会的人間の「実践的理性」は明晰さに欠ける部分もあり、最終的には個人の道徳を超えるには至らなかったように思われる。しかし、これこそが、デカルトが道徳について著作で語ることを意図的に避けた理由なのだ。デカルトにとっての道徳とは、「他の学問の全体的な知識を前提とした、知恵の最終段階であるような最高かつ完全な道徳⁴⁵」であって、あらゆることを知りつくした上でしか明確に語り得ないものだとしてデカルト自身認識していたのだ。哲学者の道徳と社会的人間の道徳との断絶を理解していたからこそ、デカルトは自分が完全な道徳を語る段階にはないと考えたのだろう。しかしここで、デカルトが完全な知恵の獲得のためには、個人と社会的人間、双方にとっての知恵の獲得が必要不可欠であると認識していたことが明らかになったのであり、このことは、『デカルト＝エリザベト往復書簡』を研究した大きな成果であると言える。

次に検討すべき課題は、『情念論』における道徳である。『情念論』は1649年にアムステルダムで出版されたのであるが、デカルトは1645年の時点で、既に情念に関する考えをまとめる作業を行っていることをエリザベトにほめかし、草稿ができ次第エリザベトに送ることを約束している⁴⁶。実際、『情念論』の草稿は、1646年3月7日にエリザベトの手に渡ったと推定されており、1646年4月25日付のエリザベトの書簡には、それを読んだエリザベト

⁴⁵ Descartes, *Principes de la Philosophie*, AT, t. IX, p. 15.

⁴⁶ 「近ごろ私はこれら全ての情念の数と順序について考えました。それらの本性をより詳しく検討できるようにするためです。しかし、この主題に関する私の意見をまだ十分に整理しておりませんので、敢えて殿下にお手紙でお知らせするようなことはできないのです。とはいえ、できる限り早くそうするつもりです。」(Lettre de Descartes à Elisabeth du 3 novembre 1645, AT, t. IV, p. 332.)

の感想と批評が綴られている⁴⁷。したがって、『デカルト＝エリザベト往復書簡』では、のちに『情念論』としてまとめられるデカルトの情念に関する思想の体系が既に形成されつつあるのである。そして、1645年10月6日付のデカルトの書簡に登場する「高邁な精神の持ち主⁴⁸」という語に使われている「*généreux(se)*」という形容詞が、やがて『情念論』において「高邁 *«générosité»*」として改めて定義されることとなるのである。この問題に関しては、稿を改めて論じることにはしたい。

⁴⁷ Voir la lettre d'Elisabeth à Descartes du 25 avril 1646, AT, t. IV, pp. 404-406.

⁴⁸ Lettre de Descartes à Elisabeth du 6 octobre 1645, AT, t. IV, pp. 307-308.